

書評

シトランゲ著 『フランス革命とロシヤ
社會の雜階級諸層』

澁谷 一郎

これは、ソヴェトの歴史學論文集 Академии наук СССР Институт истории Исторические записки (ответствен. ред. акад. Б. А. Греков) № 3, 1952, стр. 98 に掲載された M. M. Штрапе, Французская буржуазная революция 1789—1794 гг. и различные слои русского общества. の紹介である。

フランス・ブルジョア革命の勝利は、ロシヤの十月革命以前の時代で考えれば、ブルジョア諸國家の歴史の中で⁽¹⁾最も主要なものだった。だからこの勝利は、あらゆるおくれた、專制的の・ツァーリの・王の・半封建的なヨーロッパを、根こそぎゆすぶらざるをえなかった。(傍點は私) (ラヂーシチエフを理解するには、ヨーロッパにおけるイデーの戦いを……フランス・ブルジョア革命を研究せずにはできない。……ロシヤの進歩的

書評

な社會思想は、西歐の進歩的な諸イデーの影響をうけた。⁽²⁾筆者は言う、ブルジョア史家たちはロシヤの政治・經濟上の後進性にかりて、廣い住民層の共鳴を故意に否定した。彼らは、フランス革命の進行に關心をしめし、共鳴した人びとを、貴族の中の、十八世紀フランス啓蒙思想にはぐくまれた部分にししか、見いださなかった。この傾向は、すでにソヴェトの研究者によって、何回となく反ばくされてきた。この論文もまた、この線に沿うものであることは、言うまでもない。筆者が、モスクワのアルヒーフと圖書館から集めた實際の資料によって、出そうとした結論は、次の三つである。一、フランス革命の消息は、かなり正確にロシヤへ伝えられて、廣い範圍の都市住民にしみこみ、革命のプロセスと目的を、十分あきらかにした。二、當時、都市住民の中・下層のうちには、フランスの事態に大きな關心をしめし、これに共鳴する、進歩的な人びとが多かった。三、こうした共鳴ないし關心は、ロシヤの現實によって生れ、また、封建Ⅱ絶對制にたいする獻身的な戦い・農奴制下の壓迫とひどい官憲の反動、の中に發達したロシヤの革命思想によって生まれた。

論文は四つの部分にわかれてゐる。以下で順を追って、その言うところを要約しよう。

十八世紀の後半はロシヤにとって、封建Ⅱ農奴制の崩壊と新

しい資本主義的機構の形成の時期である。家内工業^{クサヤ}と國內市場の發達につれて、都市人口が増加し、貴族と聖職者以外の住民——町人^{ボロヂン}・人出の商人・企業者・雜階級インテリゲンツィヤ（教師・醫師・代言人・寫生など）・自營職人・やとわれて働く人びと——が、目立つようになる。同時に、市民の文化的水準が、高まってくる。そのパロメーターとなるのは、出版事情である。世紀末の數十年間に、ペテルブルグとモスクワはもちろん、地方にも、多くの私營印刷所と公開圖書館がひらかれた。

一七五〇—一八〇〇年の間で、七九二二の本と一一一の定期刊行物が出たが、その半分以上（五三四五）は、最後の二〇年間に出了た。大部分は、『取るにたならぬ人びと』の筆になつた。雜階級インテリは、讀むだけでなく、みずからも書き、外國語を學んで翻譯し、支配的な貴族に農奴制支持的イデオロギーに對立する自分の讀者のサークルで、しばしば讀みかされたものを出版した。二都（ペテルブルグとモスクワ）の勸工場^{Правильная фабрика}は、商業のみならず、文化の中心となる。なぜなら、ここには書店が集中したからである。一七六八年には、ペテルブルグ中に一軒だった書店が、世紀末の三〇年間に二九店とふえ、同じ期間モスクワに、二〇店が出現した。文化的中心と言へば、モスクワ大學を忘れてはならない。この若い教授たちは、首府の文化生活に進んで参加し、公開講演をもよおし、學生へロシア語で講義をおこない、歴史・哲學・自然科學・法律の諸問題を、當時の啓蒙主義的なイデーによって解明した。十八世紀末ロシ

ヤの文化現象にとって、ペテルブルグに存在したいくつかの文學に政治上のサークルは、重要である。それらはすでに、自國の封建農奴制的現實へ、抗議の聲をあげているからである。彼らはすべて、『文學友の會』へつながるが、ここでイニシアティブをとったのは、かつてモスクワ大學の學生であり、首府でさまざまな下級の官職についている人びとである。ラヂーシチエフは『文學友の會』の事業に参加し、會の雜誌『市民論叢』へ作品をのせた。それは、進歩層の中に民主的な世界觀をつちかい、強めた。その特色は、專制と農奴制を力によってくつがえす民衆の權利をみるとめ、民衆による報復の合法性を主張した點にある。同じころモスクワでノヴィコフは、別の方向に、大きな活動を展開する。彼は平和的な道をとり、主として大學出の、雜階級インテリのグループによって、當時としては大規模な、出版・啓蒙事業をおこなつた。當時出た書物の三分の一以上が、彼の手を経たと言われる。ロシア進歩層は、自國のことだけでなく、西歐一般の政治狀態にも通じ、ことにフランス文學の翻譯は、大きな意義をもつた。六〇年ごろ既に生まれたその國への關心は、そこにおける危機の増大につれて高まり、フランス・ブルジョアジの、革命前の思想家は、すべてひろく知られていた。ヴォルテールや百科全書家のほかに、ルソー、マブリー、レイナル、メルシエらが翻譯され、レサージ、マルモンテル、ボーマルシエがよく讀まれた。ロシアの進歩層は、これらの思想家の作品に、自分たちの政治的・社會的志向と合致す

るイデーを見いだした。このイデーはロシアの中に、八〇年代のフランスで急に進行した政治的事態への、活ばつた關心をかきたてたのである。新しい生産關係の發展とともに、都市住民の、政治的見解ないし要求をことにする、諸階層への分解をうながした事情へ、注意をむけなくてはならない。

二

當時のロシアで出ていた新聞は、『聖ペテルブルグ報知』『モスクワ報知』の二紙だけだった。二紙は毎號のように、パリからの通信をのせ、フランスで進んでいる事態の報道へ、最大の紙面をあてていた。立法議會の席上でおこなわれた『あらしのような辯論』と『大論争』。ミラボー、バイイ、バルナーヴなど『混亂している人民の寵兒たちの』、發言の要點からの、ほとんど逐語的な引用。パリ街頭での諸事件。『辯士たちが貧民どもを貴族の厚顔にたいする大抗議へあおりたてる』、王宮庭園でのひん繁な人民集會。『槍を手にした多くの貧民と女房たちの群が、後に大砲その他の武器を従えて』ベルサイユへ進んだ、一〇月六日の事件。シャン・ド・マルスのできごと。立法議會の最も重大な決定——ブルジョア的な國民軍の創設・封建的な義務の清算・貴族特權の廢止など。人權宣言全一七條の逐語譯——それはロシアの現實の中で、特に鋭いひびきをもった。ロシアの讀者は、これらのことを注意ぶかく讀み、なりゆきを見まもった。ところでカラムジンの言によると、多くの貴族たち

は、よい環境にしながら新聞をとらないが、貧しい人びとはすでに、それを讀むことを好んでいる。民衆のこうした傾向は、バスチーユ陷落を聞いて、人びとが街頭で、自分たちがくびきから解かれたかのように、祝いあいながら抱擁したことにも、反映している。ロシアの新聞は當初から、革命の社會的性格を強調し、立法議會での諸流派、とくに第三階級の代議員たちの間に、最初からあつた意見の違いを注目する。人民の革命的動きを抑えるため、ブルジョアジーが豫めとつた警察手段、マラーの逮捕について議會のおこなつた決議を報ずる。九〇年一月にモスクワ大學から出はじめた月刊誌『政治雜誌』では、まず過ぐる一年の、フランスの事件の全體が、くわしく説明されて、西歐の一般狀勢の特徴づけがなされたのち、毎號の紙上に、フランスにおける事態の展望と、西歐諸國の諸動向の解説がのせられた。

首都の新聞・雜誌にのる豊富な資料のほかロシアの讀者は、多くのオリジナルな革命文書を手できた。二都の書店には、フランスで出たさまざまな傾向の單行本・パンフレット・雜誌・版畫・諷刺畫が、並んでいたからである。革命にかんするこれら多くの文獻が、フランス語を知る人だけでなく、ロシア社會のより廣い範圍で、かなりの程度に知られていたことは、寫本によって知識をうると言う、一八世紀末に廣くおこなわれた習慣を考慮するならば、疑いのないところである。なぜなら翻譯者や執筆家たちは、勸工場の書物市で最もよく賣れた本を

一橋論叢、第三十五卷 第二號

すべて、『ごく安い貸銀で』譯しながら、『一番關心をそそるものを与えようと苦心し、たゆみなく努めた』からである。

當時のロシア人のことを借りるならば、『フランスでの革命は、當代のあらゆる知性をひきつけ』『革命の諸事件は毎日、かすかすの對話や激論の的だった』『フランス革命はロシアの中に、他の土地でと同じく多くの信奉者をもち』『専制權力についての自由な發言は、ほとんど一般的なことになり、さまざまな自由を志す感情は、フランスの例によって燃えさかった』『かつて司祭が、自分の説教へ好んでそえた聖書からの引用は、彼の唇を借りた一八世紀の哲學者たちと革命辯士たちの、發言へかわった』。

しかしながらここで、フランス革命の信奉者の中から、自由主義的な貴族階級と、都市住民の非特權者層のうちで進歩的な人びととを、區別しなくてはならない。前者は、啓蒙のイデーへ表面的にひきつけられたのであって、その社交界の流行を追ったのにすぎず、ロシアの現實とは、何のつながりもなかった。

三

『フランスのできごととは、同様な狂氣や恐怖の芽が現われはしないかと、注意するように、政府を特に細心にさせた』。政府はロシアにおける『反逆心』の存在をすでに疑わなかったから、手をつくして、その活動を封じようとする。九〇年四月のツァーリの布告で、『パリに特別のクラブが設立され』メムバ

ーは『自分の害毒をいたるところへ擴めようとしている』から、『警察はいかなる秘密集會・マソンのロッヂ……も許してはならぬ』とのべている。エカテリナ二世自身も、すべての學問的集會について、公然と秘密とを問わず、メムバーのリストを調べ、あるものを辭職させたり、首都から退去させたりした。二都のクラブや文學サークルはとざされ、信書の檢閲がはじまる。だがツァーリ政府のとった豫防手段にもかかわらず、フランス革命の報道がロシアへ達することは、防げなかった。

かかる状態のなかで、九〇年五月、ラヂーシチエフの『ペテルブルグからモスクワへの旅』の出現は、ロシアにおける都市住民の進歩層の政治生活にとって、大事件だった。彼は識者の前へ、自然法とロシアの現實の相關關係という、最も切實な問題を提起し、現在の社會機構を全體として、無條件に非難した。本は『公衆の非常な注意を』ひき、それを『革命の爆發をよびかけた警鐘』と取った宮廷は、そこに『ミラボーその他、狂えるフランスの調子』をみとめた。女帝は彼を『ブガチョフをもしのぐ反逆者』と斷じた。本の回収に當った警察の處置も、完全な効果はあげえず、また多くの寫本が流布されて、内容を知らせた。事件は、知性ある人びとを怒らせた。

二つの新聞と『政治雜誌』にのるフランスの報道は、刻々に反動の調子をおび、革命を『破局的な無秩序』『全國民のわざわい』ときめつけ、革命的な諸クラブは『フランスの民衆を奈落へつきおとすためにしくまれた、惡魔の道具』以外ではなくな

る。

ロシアの出版界は、國民議會が自分の立場を再検討して、これを修正し、專制的統治に必要なだけの權力を王へ返せ、と主張する『ブルジョアジーの支配的な上層部』、『現在の法制のもとに留まるよう主張する』中間グループ、ひろい民衆と小ブルジョアの代表として『共和制を願う自分の擁護者たちを伴った、ロベスピエール、ビュゾー、ベチオン』、との間におこなわれた論争を注視する。

二つの新聞は、バリの重要な事件を報じつつける。ミラボーの死。『……ラファイエットと國民議會の過半数を死刑にするよう忠告した』マラーの動き。國民議會の議事録。『氣ままな俗衆』のひきおこした、路上の混亂……なかでも王一家の逃亡。ヴァレンヌでの逮捕・バリへの強制的な歸還（九一年六月）の報は、ロシアへ大きなショックをあたえた。王の逃亡がひきおこした國民議會での激論は、新聞で廣いスペースを占めた。『政治雜誌』七月號は、全巻をあげて、『自由の狂信者の』プロバガンダに氣をつけよ、と讀者へ警告する。つづく數カ月の出版物は、ルイ王の恥をそぐため、對佛戰爭は不可避だ、との意見を組織的に流しはじめる。だが一方で、この戰爭を非難する民衆の氣分があったことは、クルーシンの未刊の詩『雌はと』からも、うかがえる。

かくて九二年は、緊張した空氣の中で始った。エカテリナが首唱し、『文明と秩序』の名のもとに、『ジャコパンの蠻狀』に

たいする王たちの同盟軍が組織されて、戦備がなつたと思われたとき、同盟のメムバーであるレオポルド二世と、グスタフ三世の死があいついで起り、ジャコパン黨の陰謀によるものではないか、と疑わせた。首都には女帝の身をめぐって、不穩なうわさがとび、革命に同情をよせるすべてのフランス人、さらには同じ傾向のロシア人へ、きびしい監視がつく。當時さかんに流れこんだ、フランス亡命評論家たちのセンセーショナルな反動文書は、貴族たちに、王・貴族・文明と教會にたいする何か國際的陰謀の存在を信じさせて、この疑惑を助長した。かくて政府は、マソンの動向へ特に注意し、ついに、進歩的なモスクワのマソンと結んで女帝にとり目の上のこぶだったノヴィコフへ、逮捕令が出る。同時に、モスクワの全書店が封印される。それまでフランスの事件と關連するせまい意味しかもたなかったジャコパンの語は、ロシアの社會通念と舊習の枠をはみでるすべてのことへ、かぶせられるにいたった。この政治情勢の中で、進歩的な傾向の人びとの立場は、ひどく困難となり、なおもフランスの事態に心をよせることは、彼らの社會生活にとって危険となった。外國からの新書は、すべて埠頭で検閲をうけねばならなくなった。しかし、政府の嚴重な警察的手段にもかかわらず、コンドルセ、コロロ・デルブヤから、マルシヤンの反動的な小新聞にいたる、きわめて多様なバリの政治的文書が、ロシアの讀者の手にとどいていた。

四

新聞・雑誌の論調は、革命フランスの事情を正確に報道するというよりも、むしろフランスにたいする、反革命的な宣傳の色を濃くしていった。六月二〇日と八月一〇日は、もっぱら《パリの狂暴な庶民の》暴挙として、表面的に語られ、王の退位も軽く扱われるにすぎない。だが八月一〇日の事件は、ロシア社會の、ブルジョアの君主制の枠をこえぬ改革を夢みていた階層にとって、轉回點となった。一方、住民の廣い層と、これを代辯するデモクラティックな雜階級インテリは、《君主がすべて、暴君・惡黨・迫害者》(ロジノーフ)であり、《專制の權力を倒したのちに、共和國と言った、すべての人が平等であるような何か別のものを創るべきだ》(クレチェートフ)と、考えた。民衆のこうした氣分の反映は、出版物の中で見られないとしても、個人的な對話の中では、《君主についての不敵なことば》《せん動的な發言》が、しばしばあったことが、秘密官房の記録に残っている。都市でも地方でも、思想を同じくする進歩的な小グループの中で、フランス革命とともにロシアの現實が、眞剣な論議の對象となり、自由な意見がのべられていた。かかる仲間には屬する一人は、少し後に書いた、《全人類にとって、かくも卑しい・低俗な・好惡な・嫌惡すべき・有害な・そしてさまたまのあらゆる幸福をうちこわすもの(王やツァーリ)が、ヨーロッパで王座を占めるとしたら、われらは言おう、彼を驅

逐することは罪だろうか?と。——新聞を讀む非特權者層にたいするツァーリの警察の危惧は、たしかに當をえていた。王の處刑(九三年一月)——當局を強く刺戟し、すべての對佛關係を斷たせた——は、ロシアの新聞に出たフランス事情の、最後のひとつだった。政府は革命の默殺によって、自國への影響を防ぐと考へたのである。ロシアの讀者は、外國新聞の手がかりにする以外は、ツンボ棧敷におかれた。だがこの外國紙にも政府の手がのびる。フランスで出た定期刊行物の輸入は禁止され、二都の書店から、《フランスの事態を扱った書物が》すべて沒收される。港と國境の税關では専門の檢閱官が、この種の本を押えて燒きすてた。當時ベテルブルグの税關で四九〇冊、モスクワでは、カラムシンの譯になる《ジュリアス・シーザー》まで含めて、八二五冊が、火中に投げこまれた。フランス書は檢閱をまぬがれるため、他の商品の間にかくされてきたり、他の書物の包装紙に用いられてロシアに入ってから、これを集めて本に再製することがなされた。しかし當時の人は言った、《モスクワの民衆の中で、はげしい諷刺が今(一七九三—九四年)ほどひどいことはなかった》。民衆の間でひそかにまわし讀みされた手寫の著書と譯書は、彼らの前に、當時の最も切實な問題——財産權・土地所有・貴族と農奴を生んだ史的原因……——を、とりあげていた。これらの著者と譯者は、《町人と農民から》出ていた。彼らは自分を《町人と百姓の善意ある教師として示し、現代の自由を、公然と、またはひそかに》説くこ

とにより、《連中をことばや著作でもって、さまざまの道ならぬことへ、あおりたてようと努めている。——雑階級インテリへ向けられたこのような反動的感情が、ひろく貴族階級をとらえていた。當局は、たまたま発見した《有害な思想にみたされた》政治的パンフレットを、《その他の全住民の面前で》、見せしめに焼いたりしたが、禁止本の作者はもちろん、流布している本そのものをさえ、組織的に押えることができなかった。

警察は、ペテルブルグとモスクワの勤工場を、特にきびしく見はった。多くの人びとが捕えられ、追放された。《觀察者》と《セント・ペテルブルグ・マキニリー》の刊行者であるクルイロフとクルーシン、農民出の詩人ローゾフは、こうしたわざわいをうけた。ルソーの翻譯者の一人であり、ノヴィコフの協力者だったプロトポポフも、首都を出ることをよぎなくされた。この時期に、雑階級インテリの多くの代表的人物たち、ク

レチエートフ、ポポフ、スロフツォフたちは、あるいは要塞へとこめられ、あるいは、さんげのために僧院へ送りこまれたのであった。

註

- 1 И. Сталин, С. Киров, А. Жданов. Замечания о конспекте учебника новой истории——Сб. «К изучению истории», М., 1946, стр. 24.
- 2 В. И. Ленин. Соч., изд. 4-е, т. 24, стр. 364.
- 3 О некоторых вопросах истории русской общественной мысли конца XVIII—первой половины XIX века. («Вопросы Истории», 1955 г., сентябрь, стр. 5.)

本文中で、註のついでにない《……》はすべて、オリジナル中での引用文である。(一九五五・一二・一〇)